

研究結果報告書

立憲政友会総裁西園寺公望は、日露戦争の最中、1904年9月19日から10月26日まで、中国揚子江地方に旅行した。先行研究では「謎」とされるこの旅行について、本研究は新史料の発掘とその分析により、その全容の解明と西園寺の中国認識の一端に迫ることを目的とした。

本研究では、西園寺の旅行中の案内役・白岩龍平の『白岩龍平日記』、『続対支回顧録』、旅行中に会見した重要人物・張之洞に関する『張之洞全集』等の関係史料、アジア歴史資料センターで公開された当該期の外交文書等を収集した。これらの史料によれば、西園寺の揚子江旅行は「病後の保養」などではなく、大きな政治的・外交的狙いを持っていたことは明白である。

第一、西園寺の長沙訪問は長沙開港（1904年7月）に因んで、揚子江流域の日本利権の確保・拡大に繋がる外交活動であった。それは第一次西園寺内閣時期（1906年1月～1908年7月）に設立された日清汽船会社とも深く関わる。第二、西園寺・張之洞会見は、日本の戦時外交に於いて無視できない役割を果たした。それは張之洞と袁世凱の往復電報や張之洞の上奏文等で証明される。張之洞は揚子江流域に最も実力を持つ政治家であり、日本の利権拡大の上で、重要な意味をもった。それは第一次西園寺内閣時期の対張之洞正金銀行借款問題とも繋がっている。

西園寺がこの旅行で、張之洞はじめ清国要人との間に築いた人脈は、当時の日本政府が対中国政策を実際に積極化する上で大きな役割を果たしたと評価できる。他方、西園寺は上海滞在中、秘書（横井時雄か）を派遣し、中国に滞在するイギリス人伝道師TIMOTHY RICHARDに会わせ、RICHARDが提唱していた世界平和を保障する国際聯盟の設立案に関し意見を交換させたことが史料から窺える。このことは西園寺の国際観を窺わせ、桂太郎や山県有朋などの政治家と一線を画す側面を有したことの現れではないかと考えられる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

題名・発表者名：「近代日本の政治家西園寺公望に関する研究

日露戦争期の中国旅行とその中国認識」・張智慧

会議名：関西知識人史研究会

日時：2012年5月20日（日）

場所：ホテルアウイーナ大阪

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）